

研究結果報告書

所属 北京大学

役職 教授

氏名 王風

研究結果

本研究は、日本に現存する重要な琴器（国宝/重要文化財級）を中心に探究するものである。これらの琴器は複雑な状況にあり、多様な出所があり、多くの学術的テーマが潜んでいる。以前の日中の学者たちは、これらについて探究してきたが、未だ体系的な検討が不足しており、お互いに直接的な交流もほとんどない。

今回は、新型コロナウイルスの影響や、収蔵機関の規定が異なるがため、実物の調査については、直接接触、公開された画像や資料をめぐる調査など、多様な方法で現存する重要な琴器について可能な限り深く研究した。一定の成果を得た。

主な内容は以下のとおりである。

1. 奈良正倉院所蔵の「金銀平文琴」。この古琴は現存する唯一の唐朝「宝琴」とされ、中国にも同種の器物は残されていない。この琴は盛唐時代のものであり、それより古いものではないと私は考える。原因としてはその胴の銘文「乙亥之年」があるためである。それは聖武天皇天平七年に相当し、唐の玄宗開元二十三年に相当する735年である。また、製作地について、一般的には大唐の「舶載品」とされているが、日本で作られたとする意見もある。私は観察した結果、この琴が現存する唐琴と根本的に異なる多くの特徴を持っているため、当時の日本の製作であると考えている。
2. 元法隆寺所蔵、現在は東京博物館に所蔵されている「開元十二年」の銘を持つ琴。それは、長らく百済を経由して唐から日本に伝わった舶来品と考えられてきた。しかしこの結論には疑問があると考えている。この琴の形式は「金銀平文琴」と一致し、中国には現存していない。ただし、書物によると「虞舜式」または「虞琴式」と見なすことができる。そのため、両琴にはある程度のある関係があると考えられる。また、「開元十二年」の銘には疑問が残っている。
3. 国立歴史民俗博物館所蔵、元紀伊徳川家の「冠古」琴。この琴は元々唐代の製品であるとされてきたが、実物検証の結果、中国から輸入されたものであるが、唐代の琴ではない。北宋のものであると考えている。
4. 宮内庁所蔵琴。宮内庁には4台の琴があり、漆の色は異なるが、明らかに同時期に作られたものである。現在の調査によると、これらは東皐心越（1639-1694）が天皇に献上したもので、彼の周りの人たちが作ったものである可能性が高いと考えられる。また、模倣されたのは東越が中国から持ってきた明琴であると考えられる。

本課題は私が担当し、稗田浩雄氏、呉本舜氏、山寺美紀子氏、早川太基氏、張建華氏などが課題チームを構成している。各専門家が得意分野で協力し、この研究が順調に進行するようにした。

本研究所で扱っている琴器以外にも、現在日本には未だ多くの琴器が存在している。その全体像や現存状況を整理するには、未だ大量の作業が必要である。これには今後の努力が必要である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. 「日本所蔵古琴器考察概略」、王風、「東アジア琴学ワークショップ」、2019年9月18日、東京大学(本郷)。
2. 《正倉院“金銀平文琴”與法隆寺“開元十二年”款琴的琴式問題》(「正倉院“金銀平文琴”と法隆寺“開元十二年”款琴の琴式問題」)、王風、「第十屆古琴國際學術研討會」、2019年9月25日、西安音樂學院。
3. 《日本古琴器中的中國製作與日本製作》(「日本古琴器中の中国製作と日本製作」)、王風、「跨語際視野下の東アジア文化交流」、2021年11月27日、復旦大學。
4. 《東皋心越的琴學與琴器》(「東皋心越の琴学と琴器」)、王風、「人文学系列講座」、2022年9月18日、北京大學。

論文(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

《正倉院“金銀平文琴”與法隆寺“開元十二年”款琴的年代與琴式問題》(「正倉院“金銀平文琴”と法隆寺“開元十二年”款琴の年代と琴式の問題」)、王風、未発表。【『故宮博物院院刊』に発表予定】

《日本古琴器的“舶來品”與在地製作》(「日本古琴器の「舶來品」と地元製作」)、王風、未発表。【『中国音樂学』に発表予定】

書籍(題名・著者名・出版社・発行時期等)

【関連著作】《琴史與琴器》(『琴史と琴器』)、著者王風、商務印書館、2023年4月